

外来語の語源

角川小辞典

26



吉沢典男・石綿敏雄



グラマー¹【英glamour】①肉感的な、性的魅力のある。〈現代〉②グラマー・ガールの略。肉体美人。肉体美にあふれた女性。〈現代〉
語源 ← *glammar* (グラマー²の変種。魔法、妖術)。文字を知っていることは魔法と関係あると考えられていたため、*grammar* が異化をおこしてきた語形。18世紀以来スコットランドで用いられていたが、Sir Walter Scottにより一般化され、19世紀の半ばに現在の意味を持つようになった。〔訳語〕魔力、魔法、心を迷わす美、人心を魅するもの(英18. 大7)、魅力(英19. 昭6)。

グラマー²【英grammar】文法。文法書。文典。〈明治〉
語源 ← 中英 *gramere* < 古仏 *gramaire* < **grammatica* < **grammaticē* (technē) (書く(技術)) < *grammaticós* (文字に関する) ⇒ *gráphein* [*グラベイン] (書く)。

グラベイン GRAPHEIN (γράφειν)

「線をひく、書く、描く」を意味するギリシア語。～グラフ、～グラフィー、～グラムの形で合成語が多く近代語に入り、また新造語を作る際の成分となっている。

外来語が身近にあふれるようになった今日、外来語を「借り物」としてではなく、市民権をもった日本語の一員として深く考えることが必要である。本書では、外来語のもとなった外国語の語源を探り、外来語同士の結びつきを考える一方、外来語とその語の示す文物がどのようにして日本語と日本人の中へ定着していったかを考える。

角川書店

角川小辞典——26

外来語の語源

吉沢典男・石綿敏雄



角川書店

著者紹介

吉沢典男(よしざわ・のりお)

東京外国語大学教授

専攻＝音声生理学・実験音声学

石綿敏雄(いしわた・としお)

茨城大学教授

専攻＝語彙論・文法論・コンピュータ言語学



外来語の語源

著 者・吉沢典男／石綿敏雄

発行者・角川春樹

印刷者・鈴木和夫

東京都台東区台東 1-5-1

製本者・若林義一

東京都板橋区舟渡 3-20-13

発行所・角川書店

東京都千代田区富士見 2-13 〒102

振替口座 東京 3-195208

電話 03-238-8551 (辞書編集部)

03-238-8521 (営業部)

初 版・昭和54年6月30日発行

第六版・昭和60年11月10日発行

装 丁・代田 葵

製版印刷・凸版印刷 製本・若林製本

落丁本・乱丁本はお取替えます

©Norio Yoshizawa, Toshio Ishiwata 1979

ISBN4-04-062600-1 C0581

序

角川小辞典シリーズの一環として辞典風の外来語の解説書を作ろうという相談をしたのは昭和51年春のことである。そのとき話題に出たのは、現在までにいくつかの外来語辞典が出版されているが、折角新しいものを作るのであれば、従来の辞書にない特色を十分にもりこんだものにしたい、ということであった。つまり、今までの外来語辞典の体裁にとらわれない新しい形式と内容を備えたものにしたい、ということ考えたのである。

種々議論した末に、その新しい特色としてわれわれが取りあげたのは、解説の中に「語源」「参考」「訳語」の欄を設け、その記述を充実していきたいということであった。それは大要次のようなものである。

1 語源欄 従来の辞典では語源の表示にあたって直接日本に入ってきたときの言語を示すにとどまっているが、この辞典ではそれをさらにさかのぼって考えてみた。各々の語源をさかのぼると、文化的な用語の多くが同じラテン語あるいはギリシア語にさかのぼることがわかる。本書では、その、もとになった古典語をとりあげて「囲み語源欄」を作り、言語的にみた全体的なヨーロッパ語の日本語への影響を明らかにした。

2 参考欄 言語が純粋に言語内の事実として発達発展してゆく状況を記述することは従来の言語理論で説かれているところであるが、言語を人間生活の中において観察し、文化史、特に対外文化史的に見ようとする、従来の言語理論の説くところでは不十分である。やはりその言葉が生まれた社会的な背景、生活文化の流れ、歴史的な事情などを明かにし、あるいは日本にとり入れるにあたっての文化受容史的情况を説明することが重要である。いわば純粋な言語辞典的な追求に加えてこの種の百科事典的な解説を充実させた。

3 訳語欄 従来の外来語辞典では、ある外来語について従来どんな訳語があったかについては、系統的に示すということをしたものがない。外来語の問題としては、その訳語との関係において外来語受容の可否是非を論ずることが多いのであるから、外来語について取りあげるときはこの問題を避けて通ることはできないはずである。本書の訳語欄では、これに対応して、訳語の一覧資料を提供するということを行ってみた。

以上3点についての説明は十分とはいえない。本書の外来語解説・ヨーロッパ語概説の項で更に敷衍した説明を行った。

さて以上3点の試みがどの程度実現されているかであるが、これは読者の批判と評価を待つほかはない。ただ全体の紙幅に制限があるため、1語の記述をくわしく

すれば、収載語数を制限せざるを得ない。このため現代外来語を1語1語につき検討し、いわば基本外来語表ともいべきものを作って、その範囲で上記の解説を行うことになった。

この辞典がこのような新しい課題を追求しようとしたことに比して、編集に許された時間は必ずしも十分とはいえなかった。このため多くの方々の協力を仰ぐことになった。

一般語の原稿作成の段階では、秋本吉徳、石野博史、岩間雅久、小島基次、当作靖彦、新橋浩、松木幹太、松村一登の諸氏の協力を仰いだ。原稿整理と編集の段階では、郡史郎、小島基次、当作靖彦の諸氏の全面的な協力を得た。「囲み語源欄」では東京大学の逸身喜一郎氏から全面的な御協力をいただいた。以上の方々の御協力がなければ本書が成立しえなかった事情をしるして、ここに感謝の意を表したい。

なお「訳語」カードの採集整理や校正などの段階で、石井由美子、泉喜与子、岩下昭子、遠藤玲子、太田由紀子、大辻裕子、金沢美代子、日下緑、佐藤忠利、清水幹夫、鈴木真理、高木翠、高野真徳、寺田悦子、遠野洋子、豊泉美奈子、中谷幸子、坂東裕子、比嘉鈴羽、藤尾玲子、堀田美智子、益子幸江、松本庸子、森本真理子、守屋宏則、安井清孝、吉沢百合子、吉野裕子、渡辺節子の諸氏の協力をいただいた。明記して御礼申し上げる。

さらに、参考欄の資料を集めるにあたっては、先行の百科事典や先賢の著書など、多くの文献類から貴重な情報を数多くいただいたが、煩を避けるため、一々資料的ソースは明記しなかった。ここに厚く御礼申しあげる。

最後に、日夜編集・校正の労をとられた角川書店辞書教科書部の方々に深甚の謝意を表して筆を擱く。

昭和54年6月

編 者

外 来 語 解 説

外来語とは 外来語は外国語から日本語の中に入ってきた単語である。いわゆる漢語も中国から取り入れたものであるから、本来外来語といってもよいはずであるが、慣習として含めない。日本で外来語というのは、主としてヨーロッパの諸言語から日本語の中に入ってきた言葉を指しているのが普通である。

外来語の歴史 日本語は古くから近隣の言語を取り入れてきた。「こおり（郡）」「みそ（味噌）」などは朝鮮語からの外来語であろうといわれ、「えぞ（蝦夷）」「らっこ」「さけ（鮭）」などはアイヌ語起源といわれる。主として漢字で書かれる漢語は中国語からの外来語である。その一部には「袈裟」「刹那」のような古代インド語の中国音訳語も含まれている。

初めに述べたように、外来語という場合は主として西洋から来た言葉を指するのであるが、西洋から直接入ってきた言葉としては、中世末・近世初期に直接日本にやってきたポルトガル人、スペイン人のもたらしたものが、その始めといえよう。その用語の内容は、「キリシタン」「バテレン」「ミサ」などのようなキリシタン用語、および「タバコ」「ラシャ」「メリヤス」のような南蛮貿易用語である。キリスト教の禁教と鎖国以後、日本との貿易を独占したオランダ人からは、通商関係で「ズック」「ガラス」「ブリキ」などの用語、蘭学関係では「オブラート」「コレラ」「メス」「アルコール」などのオランダ語を取り入れた。

明治以後は英語を中心として、フランス語・ドイツ語・ロシア語・イタリア語などを取り入れている。英語は現代外来語の80%を占め、各分野に広く見られるのに対し、フランス語は「デッサン」「クロッキー」「ジャンル」などの芸術関係、「シュミーズ」「ランジェリー」「ルージュ」などの服飾美容関係に限られ、ドイツ語は「ガーゼ」「カリエス」「ノイローゼ」などの医学関係、「アウフヘーベン」「ザイン」「ゾルレン」などの哲学関係などに限定される傾向がある。イタリア語は音楽用語に多くなっている。

明治以前は外来語の数も少なく、使用度数も低かったが、明治以後は語数も増え、使用度数も増加している。日本語の用語全体からみると、明治期には用語の増加は漢語を中心としているが、大正以降は漢語増加の傾向が衰え、語彙の増加の立役者は外来語が演じている。外来語の増加は時期によって緩急の差があり、その著しい増加は、明治後期・大正末から昭和10年ごろまでと、第2次世界大戦後にみられる。第2次大戦時は英米を敵としたために、外来語はむしろ減少した。

明治前期は維新による急激な外国文化の吸収が行われたが、主として翻訳によって行われたため、外国語そのものの知識が一般に広まるまでには至らなかったとい

ってよかろう。それでも少しずつ着実に増加はしていたのである。明治後期になると、外国語の知識の普及とともに外来語の数が増加の一途をたどる。その様子はたとえば漱石の『吾輩は猫である』などにうかがわれる。

大正期の前半はその継続であるとみられるが、後半は事情が次第に変わり、大正末期から昭和の10年代前半にかけては、外来語が急速に増加した時代であって、モダン語時代とも呼ばれる。

第2次大戦後は米国からの用語が多くなった。初めは米軍関係、民主化のための各種の用語（たとえば教育では「ガイダンス」「カリキュラム」など）が多かったが、その後は日本の新しい成長と新分野の開拓による用語が増加している。最近では外国語の知識が以前に比べてかなり広まり、そのことが外国語の日常化（たとえばコマーシャルなどにまで使われる）をうながしている。それは外来語の増加とも結びついており、和語漢語の造語力の低下もあって、外来語の増加に拍車をかけている。

このように、明治以後の諸文化のさまざまなあり方に応じて外来語は入ってきているのであって、外来語がそれぞれどの時期に日本語に入ってきたかについては、この意味で興味あることと考えられる（本書では〈昭和〉のような形で日本語になった時代を示している）。

発音・語形・意味の原語とのずれ 外来語は日本語化する際、原語との間にずれが生じることがある。ことに発音・語形・意味においてそれがみられる。

発音の面でみられる原語とのずれは、主として日本語の音声面での構造が原因である。たとえば日本語にない音は、日本語のどれかの音にあわせることが多い。r と l の相違はなくなり、right も light もすべてライトになる。英語の th の音はザ行・サ行の音に合わせ、[ə] も [ʌ] もアの音に統合する。ただし v の音のように、ヴで書き表そうとする努力もみられる。それも最近ではバ行音になることが多い。

日本語では特別の場合を除いて、子音を単独で発音することがない。そのため外国語における子音連続は母音の挿入によって多音節化される。たとえば text [tekst] の kst の部分はテキスト (tekisuto) のように、母音が挿入されることになる。cake ケーキ, trap タラップ, tree ツリーのような場合も同様である。また日本語には促音のあとに濁音が続くという例がないので、原語のその位置の濁音が清音に変わる習慣がある。bed ベット, pad パット, handbag ハンドバックなど。

語形の面では、文法的な語尾などが省略されたり、長い単語を短く切る傾向が強い。文法的な語尾の省略の例としては、corned beef コーン・ビーフ, smoked ham スモーク・ハム, setting lotion セット・ローション, die casting ダイ・カスト, on the rocks オン・ザ・ロック, sunglasses サングラスなどがあり、長い語の中途切断の例としては、アルミニウム→アルミ, インフレーション→インフレ, ストライキ→スト, セcondハンド→セコハン, マス・コミュニケーション→マス・コミその他多く

の例がある。

意味の面で外来語が原語との間にずれをもつようになった例もある。スマートという語の英語での意味を調べてみると、日本語の用法にあたるものもあるが、英語の場合はずっと広い用法をもっている。動詞や名詞の用法もあるが、形容詞に限ってみても「鋭い、強い、激しい」というのが最も中心的な意味である。日本語は英語の中のごく一部の用法をコピーしたにすぎない。いわばきわめて限定された用法しかない。イニシャルという時、日本語では名前の頭文字に限定して使う傾向があるが、英語では「初めの」「第一の」などと広く一般的な意味に使用されるのが普通である。

用法を狭くし、限定するこのような傾向が多くの語にみられるが、時にはまったく他の意味に用いられることもある。フランス語で前置詞 avec は「…で」「…と共に」などの意味をもっているが、日本語のアベックは男女同伴を指すのが普通である。サイダーは英語では「リンゴ酒」であるが、日本語では炭酸ソーダの清涼飲料水である。ランチは英語では「昼食」であるが、日本語は「洋風定食」である。

和製語 このように、語形や意味などでのずれの生じているものを和製語ということがある。本来日本製ということであるが、その多くは原語である当該外国語との間に意味の差を生じていたり、その外国語では通用しないものである。どんなものを和製語というかについては人によって意見が必ずしも一致しないが、その最も典型的なものは、要素要素は外国語でありながら、その組合せが外国語にないものである。たとえばゴーストップは英語では traffic signal というべきで、英米人にゴーストップと言っても理解されない。オフィスレディーやその略語の OL も英米人に理解されない。これこそ文字通り日本で作った言葉である。

外来語が原語と発音・意味・語形がずれていることや和製語の存在は、われわれが外国語を学習したり使用したりする時、大きな障害となることはいうまでもない。外国語の学習・教育・使用の際おいに注意を要する部分である。

外来語の使用度 日本語の語彙は、その語源により大別して、日本本来の語、中国系統の語、西欧系統の語に分けることができる。これをそれぞれ和語、漢語、外来語と呼んでいる。日本語の歴史の中では、漢語は奈良・平安朝以後次第に増加し、特に明治時代に爆発的に増加した。これに対して外来語は、前に述べたように室町末期以後増加しているが、急激な増加は明治以後、特に大正以後に著しい。現代の日本語は、外来語がかなり多くなってきている。国語問題の1つに外来語の問題が考えられてきており、一部では「外来語のはんらん」の声も聞かれる。国立国語研究所で行った調査では、たとえば現代の雑誌の中に現れる用語の約10%が外来語であり、現代の新聞用語の約13%が外来語であるという調査結果が出ている。ただしこれは使用度数の多少を勘案しない計算法（異なり語数）によったものである。これはマス・コミュニケーションにおける例であり、現代日本語の平均的な一例

であろう。特殊な場合にはさらに増加する。たとえばデパートの服飾用品の売り場では、外来語の占める率は100%に近くなる。日本科学情報センターで行った科学技術用語の語彙調査では、全体の約半数が外来語となっている。このように、ある部分では、外来語が日本語の中でも占める範囲がかなり広がってきている点が注目される。特に文化的な用語にあっては、すでに造語力を失いつつある漢語にとってかわって、外来語は増加の一途をたどっている。

外来語の役割 日本語の語彙の中で、外来語の果す役割はどんなものか、を次の5つの観点から考えてみたい。

①新しい事物・概念・考え方の表現。海外の新しい事物・概念・考え方を取り入れるときに外来語が使用されるケースが多い。ボディーランゲージ(身振り・手振りなどを解析する学問)、リサイクリング(産業廃棄物の資源としての再利用)、プレートテクトニクス(海洋底拡大説)、ガイドライン(もとは、米国における、政策上の基準線)など。

②新しい感じの表現。新しい感じ、新しい感覚の表現に用いられることも少なくない。洋装小物を扱う店は以前から存在していたが、これをブティックという言葉で表現するのがこれであり、若い人々は昔から変らず存在していたがこれをヤングと表現するのもこれであろう。豪華なことをデラックス、カスタム、小さいものをミニというのもこれである。

③限定された概念・専門用語。一般的な概念とは区別して、専門的・限定的な概念を表現するために使用される外来語も少なくない。単なる速度でなく、楽曲の速度となるものをテンポといい、単にゆっくりとでなく、音楽のある特定の速さをアンダンテという。台所でナイフといえば、ほうちょう類ではなく果物ナイフか、フォークと対になるものを指すことになる。これに対してメスは医療用である。

④婉曲表現。和語・漢語などによる表現は身近すぎて露骨に聞こえる場合に外来語が使用されることがある。「便所」に対して「トイレット」、「妊婦服」に対して「マタニティ・ドレス」というのがこれであろう。性科学用語に外来語が多く、また小説などでの性描写に外来語が使われるのもそれであろう。

⑤外国語・外国文化との連続。ユーモアといえば英国の文化、英国人の生活の中に生きてきたものが暗示され、エスプリといえばフランス人の生き方がその背景にあるといえよう。このように外来語の中には欧米人の思想・生活・文化に直接深い係りをもつものが少なくない。現代の日本人にとって、言語生活の上で外国語に接する機会は少なくない。人によって差はあるが、特に外国関係の職業にたずさわる人、人文・社会・自然科学の分野にたずさわる人などにおいて著しい。このように、言語生活においては日本語と外国語の二重生活をしている人が少なくないというのが日本の現状であろう。したがって、現代における外国語教育の重要性はきわめて高いものとなり、外国語学習のために多くのエネルギーが費やされている。上

述のような外国語と外来語の連続性は、この意味で重視されなければならない。なぜならば、それは外国語の習得と外国語使用の手がかりとなりうるからである。たとえば、部屋の中での用具に、デスク、チェア、カーベット、カーテン、ドアなどの外来語があるが、これは英語の desk, chair, carpet, curtain, door などにそのまま対応している。これは英語を学習する上で大きな働きをする。そのことは、フランス語を学習する場合、上の用語は bureau, chaise, tapis, rideau, porte として記憶しなければならないことを考えれば容易に理解されよう。

使用分野による相違 外来語は使用分野による相違が大きい。それは専門語が少なくないということとも関連している。たとえば、婦人服飾用語は婦人雑誌やデパートの婦人服売場などではしばしばみられるものであっても、他の分野ではまったくみかけないことが多い。もちろん和語や漢語にも専門語にはその傾向があるが、和語や漢語、特に和語では専門語と日常語が近いので、外来語はどのかたよりは見られないのが普通である。

今日では産業の分業・専門化が高度に進んできており、日常の出来事や事件についてのマス・コミによる報道がそのような専門化にふれる機会が著しく増加している。たとえば都会地における大気汚染が問題にされると、たちまちオキシダントという専門用語が新聞や雑誌などにしばしば現れることになる。大きな地震があれば、プレートテクトニクスという地球科学用語が人の目にふれることになる。

基本的な外来語 外来語は一般的にいえば使用分野による相違が大きい、外来語の中にも、そのような特殊性が比較的うすく、その使用範囲がやや広いものがある。これが基本的な外来語であるといえよう。汎用の中型国語辞典には大体6,000語程度の外来語が収められているが、このような外来語が一般的で分野によるかたよりが比較的少なく、基本的な外来語であると考えることができよう（この意味で、本書で扱っている語は外来語の中での基本語であるといえよう）。

外来語の理解度 外来語の中には多くの人によく理解されている用語と、あまりよく理解されていない用語とが存在する（この点については、国立国語研究所およびNHK 総合文化研究所による調査がある）。いわゆる国語問題でしばしば取り上げられるものは、この後者の場合、すなわち外来語によるコミュニケーションの不充足の場合であることが多い。この点がコミュニケーション上の障害となっていることができる。

外来語を誤って使用したり、誤って理解するという例は日常しばしばみられるところである。たとえばある週刊誌で、「歌手の卵を集めてオーディション（声楽実技テスト）を行った」と書くべきところを、オークション（せり市）を行ったと書いてあったという。「人身売買」とはおだやかならぬことである。

外来語の語源 ある外国語が、外来語として日本語に入った場合、その外国語を原語という。たとえばカードという外来語の原語は英語の card である。医療機関

でカルテと呼ぶ言葉の原語はドイツ語の Karte である。料理用語のア-ラ-カルトのカルトはフランス語 carte が原語になる。カルタはポルトガル語の carta がもとなので、それが原語である。ところが card, Karte, carte, carta は、そのもとをさらにさかのぼっていくと、すべてラテン語の charta にいたるのである。このように、原語をさらにさかのぼっていった場合、これを語源というのが普通である。本書では語源欄を設けて、原語の語源をくわしくさかのぼった。

ヨーロッパの言語の語源をさぐってゆくと、ラテン語からギリシア語へ、さらにさかのぼるとインド・ヨーロッパ語の祖語にまでさかのぼれることも少なくない。ギリシア、ラテン語がヨーロッパ語の中で演じている役割りも指摘されよう。また語によってはゲルマン語起源のものもあり、他のヨーロッパ語の系統のものもあり、また語によっては、他の言語にさかのぼるものもある。「タバコ」は中米の原住民の言葉からスペイン語を経てヨーロッパへ伝えられたものであるし、ジャンボはアフリカの原住民の言葉から米語を経て日本語に入ったものである。

これらの語源、特にその中心をなすヨーロッパ語の語源を調べるためには、たとえばラテン語 charta からどのような事情で英・独・仏・ポルトガルの諸言語に入り、どのような事情で card, Karte, carte, carta のように語形の分化が生じたのかの説明をしなければならない。このためには、ヨーロッパ各言語の歴史的な事情、各言語間の関係その他を理解しなければならない。そこで本書では語源を理解するためのヨーロッパ語に関する概略を、「ヨーロッパ語概説」中で述べた。

外来語の語源を知ることの意義 外来語の語源を知ることにはどんな意義があるか。語源を知ることには、まず好奇心を満足させるということがいわれよう。あるいは、学問的な興味から真実の姿を明らかにしたいという人もあるかと思われる。しかしそこには、日本語を使って生活する人にとって、もっと実用的・実地的な意義があると考えられる。

すでに述べたように、外来語は日本語の中では、新しい事物や考え方を表現する言葉として使用される。文化用語・科学技術用語、その他近代生活専門分野の各種テクニカルタームとして使用されている。数こそ多数派ではないが、いわば日本語の語彙の中で、重要な部分に使用されているということが出来る。ところが外来語は日本語とは系統の異なるヨーロッパ系の言語から入ってきたものである。したがって単語の形や意味が和語や漢語のそれとは無縁であり、孤立している。外来語の意味が理解しがたいとか、誤用がおこるとか、多くの人に知られていないとかのすでにのべた現象は、このような事実を根源として出てきたものといえよう。

しかしここで考えてみなければならないことは、外来語と和語・漢語を結びつけるのは無理としても、外来語どうしを、われわれは互いに関係のないものとして考えてはいないか、ということである。ヨーロッパ語はどうせ日本語とは関係のない言葉なのだから、日本語を考える上でヨーロッパ語のことを考えるのは無意味なこ

とだと考えてしまいがちである。ところでよく考えてみると、外来語は日本語になった言葉であり、すでに日本語の一員となっていることは疑いのない事実である。だとすれば、日本語の語源の研究の一部として日本の外来語に関係したヨーロッパ語の部分をもとめて考えてみる必要が出てくるのではないだろうか。いままでそういう考え方はあまりされてこなかった。言語の系統の研究ならともかく、語源研究としては、むしろこの部分を積極的に取りあげようという試みがあってもよいはずであった。それがまったくなかったとは言えないが、少なくとも、日本語の語源研究という位置づけは与えられていなかった。ただ中国語に関しては、漢字の字源・漢語の語源研究が日本人の立場から行われている。中国語もヨーロッパ語も日本語にとっては同様に外国語である。影響時日の新古、その範囲の広い狭いに差はあっても、その性質において異なるところはないはずである。

そこでカードとカルテとカルトとカルタを関連づけて考えてみようというのである。音響機器としてのオーディオとオーディションを結びつけて考えてみると、これはラテン語の *audire* (聞く) という言葉から出ていることがわかる。そこから *audio-visual* が「視聴覚」になる理由もつかめ、英語の *auditorium* (講堂), *audience* (聴衆) とも関連がつく。このようにして外来語がばらばらにならずにまとめて理解され、その理解を和語・漢語と同列に高めるための基礎が与えられるのである。ついでながら、オーディションが外来語の場合には原語のもつ意味の一部にすぎないこともたしかめられよう。いわゆる「和製語」の問題にもふれることができ、英語の単語との連絡もできることになり、その意義は倍加されるのである。本書では各語にその語源をしるし、それに加えて主要なギリシア、ラテン語をひろって囲み記事をつくり、そこで外来語の語源をまとめて解説しているのは、以上のような意図から出たものである。

外来文化受容史としての一側面 以上、外来語が言葉としてもっているいくつかの問題について述べてきたが、もう1つ、外来語を扱う上で忘れることができぬ問題がある。それは、外来文化受容史としての一側面を外来語はもっているということである。特に事物・概念などを表す外来語については、興味深い問題が多い。たとえば、エンサイクロペディアについていえば、われわれ日本人がエンサイクロペディアの実物に接したのはいつ、どのような書物によってであったのかとか、日本人自身がエンサイクロペディアを理解した上でみずからの手でこれを編集したのはいつのことであったのか。それは単に言葉の意味を理解しただけではなくて、西欧文明の所産の1つであるエンサイクロペディアを十分咀嚼(くわく)した上での編集であったはずである。いってみれば、全く異質の他国の文物を、われわれ日本人がどのように受容してきたかを示す手がかりをそれは示していよう。また、スキーが日本へ入ってきたのはいつ、どこで、だれによってであり、それがどのような形で普及していったかなどを知るのも尽きせぬ興味をそそられよう。今日一般的になったホ

テルの日本第1号はどこのホテルでそれはいつごろのことであったのかということも、日本式旅館との関連においておもしろい歴史であろう。本書においては(参考)欄を設け、多くの資料・文献によっていわゆる「事始め」的記述に意を用い、外来語のもつ、上述のような一側面をできるかぎり解説するように努めた。なおまた、この(参考)欄には、「シルク・ロード」の命名者は誰なのか、「ジェノサイド」という新造語を作りだしたのは誰なのか等々、純粋の(語源)欄からはみ出すような記述についても収録してあるので、あわせてご注目いただきたい。

訳語からカタカナ語へ　すでに度々述べてきたように、今日のカタカナ外来語もわが国へ入ってきた当初は、いわゆる外国語として入ってきたのであるが、これら外国語を受け入れるにあたって、われわれの先輩たちは、まずどのような方法によってのであろうか。全く異質の文明をもっている外国の言葉を日本に導入するのであるから、ずいぶんと苦労があったことは言うまでもないであろう。たとえば、幕末から明治へかけて多く刊行されている「啓蒙的」西洋案内書、解説書などを見れば、その一斑が理解されよう。また、続々と編集・刊行された対訳外国語辞典類をみても、先賢の苦労が偲ばれる。特にこれら対訳外国語辞典は、いわば電圧のまったく異なる外国語(または外国文明)を、わが国へ導入・流入させるための一種の「変圧器」としての役目を果たしたという点で、重要な役割を担っていたといえることができる。

本書においては、(訳語)欄を設け、見出し語に対応する語について、幕末から明治・大正・昭和初期の対訳外国語辞典・百科事典・外来語辞典類およそ70種あまりを検索し、その「訳語」を採集・記録し、特に今日使われているカタカナ外来語の意味・形に対応する部分についての訳語を初出文献に限定しつつ、年代順に収載してある。

これら「訳語」を一覧すると、いろいろおもしろいことがわかる。たとえば、エンサイクロペディアの項の(訳語)欄を見ると、「万学辞林」「智環」などの新造語または語源的直訳語あり、「節用集」「三才図会」などの在来文物の名を借用した訳語あり、さらには「百科全書」「博学」などであり、今日的な「百科事(辞)典」に落ち着くまでの時代的経緯がよくわかる。いったい、これら訳語の類は、すでに多くの学者が指摘しているように、在来語をそのまま用いたもの、中国語から借用したもの、新造したもの、説明的訳語をつけたものなど、実に多くのものがあって、先輩たちの苦心を如実にものがたっている。

また、これら訳語の中には、今日通行の漢語とまったく一致しているものも多くあり、それはそれで、近代語彙の歴史として眺めれば別の興味も湧いてくる。ごく大胆に言って、明治・大正時代の訳語は今日ほとんど廃語・死語となっているものが多いけれども、大正から昭和初期にかけてのものは、現今一般に通用している漢語が多く、訳語というよりは、国語の近代語彙史の一面についても有力な傍証を提

出する資料となるであろう。

さらに、訳語の中には、漢語としての訳語に対して、カタカナ語、それも見出し語形そのままのカタカナ語がみられることにも注目したい。現今の英和辞典類で、piano, hammock を検索すると、ただ「ピアノ」「ハンモック」とカタカナ語が示されているだけで、それ以上何の説明もないのが普通である。これは、ピアノなりハンモックがひろく一般化していきまさら蛇足を加えることもないとする編者の見識によるものと判断される。本書で取りあげた対訳辞典類の訳語をみても、古く明治末期または大正期にすでに、漢語の訳語と並んでカタカナ語をのせているものが多くあり、さらには、昭和に入ってはカタカナ語のみに止めている例が多くある。これらカタカナ語の出現は、上に述べたピアノ、ハンモックの例と同じく、それらの事物がその時点ですでにひろく一般化していたと判定されていたものであると考えられる。そういう意味でみると、本書(訳語)欄の訳語が、漢語からカタカナ語への移り変りを示しているときには、対応する言葉(あるいはそれが示す事物)の、一般化・大衆化の時期を傍証する1つの資料となると思われる。

ヨーロッパ語概説

ヨーロッパの諸言語は世界の諸言葉の中で現在最もよく研究されており、膨大な研究成果が集積されている言語である。ここではそれを要約しようとするのではなく、その中で「外来語の語源」を記述するにあたって特に必要なところを選び出して略述するのである。

A ヨーロッパ語の系統

ヨーロッパの諸言語 ここでヨーロッパ語というのは、ヨーロッパを中心に現在では広く世界に流布している諸言語である。それは地域的なものでなく、歴史的・系統的な意味をもつものである。地域的にみると、ヨーロッパ地域内ではフィンランド語、ハンガリー語、フランス・スペイン国境付近のバスク語などが話されているが、これらは系統的にはヨーロッパ語ではない。逆に地域はヨーロッパの外であっても、古く中央アジアの交易に活躍したソグド人の言葉や、古代インド語（サンスクリットほか）、ペルシア語などはヨーロッパ語の系統であり、近代においてはロシア語、英語、スペイン語、ポルトガル語、フランス語、オランダ語などが広くヨーロッパ以外の地に発展・普及した。以上のように地域と言語の系統とはいろいろな意味で一致しない。そこでここではヨーロッパを中心に、現在広く世界に流布している言語をヨーロッパ語と呼び、上述の英語、ロシア語、スペイン語、ポルトガル語、フランス語、ドイツ語などを中心としてそれに関連する諸言語、関連する古典語などを指していうことにする。

ヨーロッパ語の系統 ヨーロッパの言語が系統的に互に関連があるということはどういうことを指すのかをここで説明したい。

ヨーロッパの諸言語の単語の中には、同じ形、類似の形をしているものがよくある。たとえば「男」を意味する単語は、英語では man、ドイツ語では Mann、「手」を意味する単語は、英語では hand、ドイツ語では Hand である。このような類似の単語を任意に拾ってゆくと、たとえば次のような表ができる。

「手」	英 hand	仏 main	露 ruka
	独 Hand	スペイン mano	ポーランド reka
	オランダ hand	伊 mano	チエコ ruka
	デンマーク hånd	ポルトガル mão	セルビア・ロシア rukа
	スウェーデン hand		

「父」	英 father	仏 père	露 otets
	独 Vater	スペイン padre	ポーランド ojciec
	オランダ vader	伊 padre	チェコ otec
	デンマーク fader	ポルトガル pai (padre)	セルビア ロシア otac
	スウェーデン fader		

ポルトガル語では「父」の意の時は pai, 「神父」の意の時は padre を用いる。

「夜」	英 night	仏 nuit	露 nochj
	独 Nacht	スペイン noche	ポーランド noc
	オランダ nacht	伊 notte	チェコ noc
	デンマーク nat	ポルトガル noite	セルビア ロシア noć
	スウェーデン natt		

「手」の例は全体としての類似性はないが、英語、ドイツ語、オランダ語、デンマーク語、スウェーデン語のグループ内では似た形をしているし、フランス語、スペイン語、イタリア語、ポルトガル語のグループ内でも似た形をもっている。ロシア語、ポーランド語、セルビア語などのグループ内でも同様である。ここで、英語などのグループにゲルマン語、フランス語などのグループにロマンス語、ロシア語などのグループにはスラブ語という名前をつける。たとえばロマンス語の成立については、歴史的にローマ帝国の版図の拡大とローマ軍兵士やローマ人の移住によるラテン語の変化と分化の結果生じたことが知られている。このことから、上記の3グループがそれぞれ同一の祖先から生まれたものであることが推測される。

「父」の例も同様である。それぞれのグループ内での類似性はあるが全体としては類似性がみとめられない。

「夜」の例ではグループ内での類似性はもちろんのこと、グループを越えた類似性が認められる。このような例の存在はさきのラテン語の例から考えて、これら3グループ間に共通な、さらに古いある言語の存在が想像される。ヨーロッパでは19世紀にこのような研究がさかんになった。古代インドの言語サンスクリットとヨーロッパ語に親近性が認められ、言語と言語を比較してその系統をたずねる比較言語学が発達した。

研究が進むとそれまでに気づかなかったことが明らかになることもあり、ヨーロッパ語が1つの系統的なまとまりをなすこと、言語が歴史的に変化し、その変化にある法則が存在すること、などが次々と明らかになった。たとえばゲルマン語においては、B.C. 3～2世紀にそれまで語頭で p の発音だったものが f になったということ、「父」の例で、ゲルマン語では f で始まるがその昔は p であったことが明

らかになった。そうすると「父」のゲルマン語諸形はラテン語の *pater* やそれから生じたロマンス語各言語とますます接近することになる。

このようにして、現在ではヨーロッパ語は1つの祖先として考えられる「印欧祖語」からいくつかの言語（ゲルマン語、ロマンス語などのもとの言語）が生まれ、それからさらに分化が重ねて行われて現代の形になったと考えられている。これらの言語を総称してインド・ヨーロッパ語族（印欧語族）と呼ぶようになった。これはトルコ語、モンゴル語などを含むアルタイ語族や、アラビア語、ヘブライ語、古代エジプトの言語などを含むセム・ハム語族などと対立するものである。

印欧祖語については、その単語の形や文法などについての研究が進みつつある。たとえば「父」は **pater*, 「夜」は **nekwt-* という形が推測されているが、これらは文献上に現れた形ではなく、推定再構成された形なので、語頭に「*」を付けて示すのが普通である。

印欧祖語から分派したものの中で主要なものを拾うと、バルトスラブ語（ロシア語、ポーランド語などがさらに分化して生まれた）、ゲルマン語（英語、ドイツ語など）、ケルト語、イタリック語（ラテン語など）、ギリシア語、ヒッタイト語、インド-イラン語（サンスクリット、ソグド語、ペルシア語など）、トカラ語、アルバーニア語、アルメニア語などがある。インド-イラン語グループの単語は、仏教用語として中国経由で古く日本語に伝えられている。この系統の言語にはサンスクリット、-ブラークリットなどが含まれる。サンスクリット（梵語）は大乗仏教の経典などに使用された、格式のある文学語であった。これに対して俗語の位置にあったのがブラークリットであり、ブラークリットの中で小乗仏教の経典に用いられたのがパーリ語である。

B 印欧諸言語の文法構造

この印欧語全体は、上述のように系統的に結ばれているものであるが、1つの言語が歴史的に変化してもその構造が本質的な変化を受けることが少ないという事情があるので、印欧語は全体としてかなりよく似た構造をもっている。その典型的なものは、語尾変化などで文法的な関係の相違を示すいわゆる屈折という現象があることで、印欧語は屈折語の代表的な例としてよくあげられる。

もちろん例外は存在する。たとえば現代英語や現代ペルシア語は屈折という現象をほとんど失ってしまった。この意味では現代英語、現代ペルシア語はむしろ例外的な印欧語であり、少なくとも典型的な印欧語とはいえない面がある。

ここでは多くの印欧語に共通する現象としてこの屈折に関連した事項を取りあげ、簡略に述べてみたい。

名詞と動詞 屈折に関連する品詞といえば、名詞と動詞がまず考えられよう。このほか、形容詞、代名詞などにも屈折は認められるが、代名詞のは大体名詞と同じ